

List of exhibits

No	Title	Artist/Produced area	Period/Century	Material	Size(cm)
1	◎ Segment of a Commentary on first half Vajracchedika-prajnaparamita	KUKAI (774-835)	Japan, 9th century	ink on paper	26.7×43.2
2	Vase with Round Body		Japan, 8th century	sahari (an alloy of copper with tin, lead and zinc)	H. 31.3
3	Tea Caddy of Katatsuki (Angular Shoulder) Type, Known as "Matsunaga"		China, 15th - 16th century	pottery	H. 7.9 D. 6.4
4	Plum Blossoms	Attributed to OGATA Korin (1658-1716)	Japan, 18th century	gold and silver on paper	66.5×37.6
5	Tea Bowl, Ko-unkaku Style Celadon		Korea, 14th century	porcelain	H. 10.1 D. 12.7
6	Water Jar with Decorative Flanges, Kofuki Type		Korea, 15th - 16th century	pottery	H. 12.7 D. 19.2
7	Tea Scoop and Case, Known as "Chaso"	SEIGAN Soi (1588-1661)	Japan, 17th century	bamboo	L. 18.3
8	Flower Vase of Woven Shirasabi Grass		Japan, 16th - 17th century	bamboo, rattan	H. 18.5 D. 16.8
9	Tea Bowl Known as "Jikkoku", Kofuki Type		Korea, 15th - 16th century	pottery	H. 7.8 D. 14.7
10	Tea Bowl known as "Jirobo", Chojiro (?-?) Raku Ware, Kuro-raku Type		Japan, 16th century	pottery	H. 8.4 D. 11.2
11	Tea Bowl Known as "Kotaro-ga-fuchi", Raku Ware, (1852-1903) Kuro-raku Type	MASUDA Himoku	Japan, 19th - 20th century	pottery	H. 8.1 D. 12.5
12	Water jar, Bizen ware		Japan, 16th century	pottery	H. 17.7 D. 18.4
13	Set of Four Mukozuke Dishes, Mino Ware, Shino Type		Japan, 16th century	pottery	H. 5.0 D. 8.8 (each)
14	Hotei, God of Fortune, Watching Cock Fighting	Traditionally attributed to Liang Kai (12th-13th century)	China, 14th century	ink on paper	78.1×31.4
15	Waka Verse	FUJIWARA no Nagafusa (1167-1243)	Japan, dated 1200	ink on paper	34.1×45.9
16	Letter Exchange with Comical Verses	HOSOKAWA Tadaoki (1563-1645) TAKUAN Soho (1573-1645)	Edo period	ink on paper	17.5×41.4

- "First half" on view 6/21-7/24.
- Works on display may change without notice.

まつ なが じ あん ます だ どん おう 松永耳庵と益田鈍翁

Matsunaga Jian and Masuda Don'o

会期 2022年6月21日(火)-9月4日(日)

会場 松永記念館室



出品No.9 粉吹茶碗 銘「十石」

益田鈍翁（1848-1938）は三井物産の創立にかかわり、三井財閥を長きにわたって支えた実業家です。多くの名品を蒐集した茶人としても知られており、松永耳庵（1875-1971）を含む多くの実業家を茶の湯の世界へと引き入れました。本展では松永と鈍翁の関わりを示す作品を、エピソードを交えて紹介します。

（学芸員 宮田太樹）

耳庵と鈍翁は、いつ、どのように知遇を得たのか。そのあたりの事情を教えてくれるのが、耳庵の茶友である仰木政斎が記した『雲中庵茶会記』に載る昭和11年（1936）11月1日の記事です。それによると、耳庵が初めて茶の湯に親しむきっかけになったのが、昭和9年に夫人と共に大師会に参加したことであったといいます。

大師会とは、鈍翁が創始した茶会のうち最も著名なものひとつです。鈍翁が明治28年（1895）に弘法大師・空海の書である「崔子玉座右銘断簡」を入手したことを記念して空海の命日に法要を設けることとし、翌29年3月21日に第1回を挙行しました。回を重ねる中で法要としての性格は薄れ、数寄者自慢のコレクションを披露する茶会へと変化していきます。その結果、会へ招かれること自体が自らのステータスを示すようになっていったのです。

耳庵が大師会に初めて招かれた昭和9年当時、彼は茶の湯には親しんでいませんでした。ですが、既に電力業界で重きをなしており、その豊富な財力で別荘建築など趣味生活にも力を入れていました。こうした活動が鈍翁の目にとまり、大師会へ招かれることとなったのでしょう。

少し話が飛びますが、鈍翁が亡くなった昭和13年（1938）から20年後の昭和33年に開催された大師会において、耳庵は席持主を務めています。空海筆《金剛般若經開題残巻》（作品1、前期展示）を始め、《王子形水瓶》（作品2）や《唐物肩衝茶入 銘「松永」》（作品3）など耳庵渾身の道具組で席に臨み、おおいに好評を博しました。この時、耳庵の脳裏には自分が茶の湯に親しむ機縁になった20年以上前の大師会の様子が浮かんでいたことでしょう。それと同時に、客人を喜ばせることを茶の湯の本旨とした鈍翁の慈愛に満ちた人柄に、改めて思いをはせたのではないでしょうか。

それでは、耳庵が初めて大師会へ招かれた昭和9年に話を戻しましょう。この年の12月に杉山茂丸から「自動車一パイ」の茶道具を贈られた耳庵は本格的に茶の湯の世界へ足を踏み入れます。その後、破竹の勢いで茶道具の名品を蒐集し、鈍翁をはじめとする茶の湯界の大御所を招いての茶事を主催するに至ります。

それは、昭和12年（1937）2月22日、耳庵が熱海の別荘に構えた十国庵で茶事を行った時のこと。尾形光琳筆と伝わる《金銀泥梅花図》（作品4）を床に掛け、茶碗に《古雲鶴筒茶碗》（作品5）を用いました。い

ずれも鈍翁からは好評で特に作品5は「正月と春の海の気分がでている」と褒められたといいます（「益田翁招待」『茶道三年』）。これに気を良くしたのでしょうか、作品4、5は耳庵の新年の茶事の定番として頻繁に用いられることとなります。

さて、茶の湯に親しみ始めてから急速に成長を遂げた耳庵でしたが、鈍翁と茶人として共に過ごした時間はそれほど長くはありませんでした。というのも、先述のとおり鈍翁がこの世を去ったのは昭和13年、耳庵が茶の湯を始めてわずか数年後の出来事でした。

耳庵の鈍翁に対する敬意は彼の没後もやむことはなかったようで、命日である12月28日に鈍翁を偲ぶため、縁故者を集めての追悼茶会を度々開催しています。『雲中庵茶会記』をたよりに耳庵が主催した鈍翁忌で用いた道具をいくつか拾い上げてみると、昭和23年に《粉吹繩耳水指》（作品6）、《茶杓 銘「茶僧」》（作品7）、昭和28年に《白錆籠花入》（作品8）、《粉吹茶碗 銘「十石」》（作品9）、昭和29年に「長次郎作の茶碗」（作品10のこと？）《黒楽茶碗 銘「小太郎ヶ淵」》（作品11）、《備前矢筈口水指》（作品12）などがあります。

また、耳庵は鈍翁がかつて所蔵していた茶道具を積極的に蒐集し、自身の茶会で用いています（作品13～16）。このうち藤原長房筆《和歌懐紙》（作品15）には、面白いエピソードが伝わるので最後に紹介しておきます（「松下軒名残の茶」『雲中庵茶会記』）。

昭和31年10月7日、小田原の自邸である松下軒へ茶友の仰木政斎を招いた時のこと。略式簡素な茶風で評価を得ていた耳庵がどのような趣向をこらすのか、客人たちの期待は高まっていました。席に入ると床には長房の和歌が掛けられ、背後の荒壁とも調和して詫びた風情を醸し出していました。

一同が感じ入っていると、耳庵から「知人から松茸が届いたので牛すき焼きを差し上げよう。」と驚きの発言が飛び出します。これには政斎も「茶事にあるまじき型破り」と呆れながらも、「長房卿も『まさか自分の歌の前で牛鍋とは』とほほえんでいるだろう」と耳庵らしい破天荒な茶事を楽しんだようです。

耳庵は鈍翁の茶風を評して「客を愛し、客が喜ぶのを喜ぶ」（「鈍翁・三溪の茶」『日本之茶道』第5巻第11号）と記しています。質素閑寂な茶を旨とした耳庵が時に、破天荒と呼ばれるほどの趣向を見せるのは、鈍翁の「客を愛し、客が喜ぶのを喜ぶ」という茶の湯の精神を継承しているからなのかもしれません。

- ・前期の記載がある作品は、6月21日（火）～7月24日（日）までの展示です。
- ・都合により展示作品を変更することがあります。

出品作品リスト

No	作品名	作者名・产地	品質	時代・世紀	法量(cm)
1 ◎ 前期	金剛般若經開題残巻	空海(774-835)	紙本墨書	平安時代 9世紀	縦26.7 横43.2
2	王子形水瓶		佐波理製	奈良時代 8世紀	高31.3
3	唐物肩衝茶入 銘「松永」		陶器	明時代 15-16世紀	高7.9 脊径6.4 口径3.2 底径3.0
4	金銀泥梅花図	伝・尾形光琳 (1658-1716)	紙本金銀泥	江戸時代 18世紀	縦66.5 横37.6
5	古雲鶴筒茶碗		磁器	高麗時代 14世紀	高10.1 口径12.7 高台径6.3
6	粉吹繩耳水指		陶器	朝鮮王朝時代 15-16世紀	高12.7 径19.2 高台径8.3
7	茶杓 銘「茶僧」共筒	清巖宗渭(1588-1661)	竹製	江戸時代 17世紀	長18.3
8	白錆籠花入		竹・藤製	桃山時代 16-17世紀	高18.5 径16.8
9	粉吹茶碗 銘「十石」		陶器	朝鮮王朝時代 15-16世紀	高7.8 口径14.7 高台径5.3
10	黒楽茶碗 銘「次郎坊」	長次郎(生没年不詳)	陶器	桃山時代 16世紀	高8.4 口径10.4 脣径11.2 高台径5.0
11	黒楽茶碗 銘「小太郎ヶ淵」	益田非默(1852-1903)	陶器	明治時代 19-20世紀	高8.1 口径10.3 脣径12.5 高台径5.1
12	備前矢筈口水指		陶器	桃山時代 16世紀	高17.7 口径10.4 脣径18.2 底径18.4
13	志野四方向付		陶器	桃山時代 16世紀	高5.0 幅8.8(各)
14	鶴骨図	伝・梁楷(12-13世紀)	紙本墨画	元時代 14世紀	縦78.1 横31.4
15	和歌懐紙	藤原長房(1167-1243)	紙本墨書	鎌倉時代 正治2年(1200)	縦34.1 横45.9
16	細川忠興(1563-1645) 沢庵宗彭(1573-1645)		紙本墨書	江戸時代	縦17.5 横41.4